第６回厚木市複合施設基本設計等業務委託に係る技術提案書特定委員会 会議録

会議主管課	市街地整備課
会議開催日時	令和３年６月 13 日（日）午前９時 20 分から午後６時 30 分まで
会議開催場所	厚木市役所第二庁舎 16 階会議室ほか
出席者	委員　　７人 （欠席：なし） 事務局 　都市整備部市街地整備担当部長、 　同部市街地整備課中町第２－２地区整備担当課長、 　同部同課副主幹兼中町第２－２地区整備係長、 　同部同課同係副主幹、同副主幹、同副主幹、同技師、同主事
公開日	令和３年６月 30 日（水）

会議内容は、次のとおりです。

会議録
１　特定委員会委員と小林厚木市長との意見交換 (1) 小林市長 挨拶 (2) 大野委員長及び委員 自己紹介 (3) 事務局からの事務連絡 　会議資料１～５について説明。 　質疑なし。 ２　プレゼンテーション及びヒアリング (1) 市長 挨拶 (2) 開会（大野委員長 宣言） (3) プレゼンテーション及びヒアリング 　Ａ者～Ｅ者の５者からプレゼンテーション及びヒアリングを実施。 　質疑の概要は次のとおり。 ア　提案者Ａ Ｑ１　１階「私たちの舞台」について、市民自治の活動拠点としている考え方を説明してほしい。 Ａ１　市民自治が自分たち事として集まる空間として、「点」ではなく「トレイル」と考えている。 Ｑ２　階「私たちの舞台」について、１階は半屋外スペースとしてオープンの場となっているため、施設としての顔が見えにくい。ＧＬレベルの人からの見え方を説明してほしい。 Ａ２　人が集まっている風景が施設の顔と考えている。広場的なスペースと捉えるだけではなく、線状で上階へ繋がる場と考えている。 Ｑ３　メディアの環境は今後大きく変わってくる。それに伴い連携部分、トレ

イルがどのように変化していくか、設計的な見解がほしい。

Ａ３　トレイルは、らせん状の構成で４階までつながっており、リアルな空間、向かい合う空間、それぞれが情報で繋がる空間になると考えている。家具、備品等で仮設的な構成とし、変化に柔軟な対応をしていく。

Ｑ４　厚木トレイルについてフィジカルな工夫を説明してほしい。

Ａ４　厚木トレイルは、ハードとソフトの中間的な空間。１階から３階までの空間は、全体を明るくしようとは考えておらず、場所ごとで光環境を整え、居場所をつくる。厚木トレイルは、市民自治の活動の運営を支援する空間としている。都市空間と連続して、まちの力を取り入れる。

Ｑ５　１階の活動拠点を半屋外とした理由はなにか。

Ａ５　半屋外的な空間としてラフに使えることで活動の幅が広がり、変化に対応して生まれ変わっていくことを許容する空間と考える。半屋外空間を備えた市庁舎の実績がある。

Ｑ６　紙ベースの働き方に対応しているようで、新しい働き方が見えてこない。

Ａ６　最初に全てを決めてつくると消化不良となる可能性もあるため、働き方を時系列で提案することを考えている。初めの「問い」が大事と考えている。職員が歩き回ることで「問い」を拾うことができる。

Ｑ７　メインエントランス部分にレンタサイクルがある意図は。

Ａ７　交通の在り方は、今後大きく変わる可能性がある。バス利用の大きな移動からサイクルの小さな移動にも対応できるよう考えた。

イ　提案者Ｂ

Ｑ１　働き方、図書館、メディアも変化してくる。これに対する建築的な回答を聞かせてほしい。

Ａ１　図書館も本が減ってくる。ＰＣ作業をしている利用者の方が多い図書館もある。ワンダースクエアの書架を減らして、賑わいの交流スペースや静かな空間に変更することができる。外に緑が見えて本を読むことができるような空間を考えている。

Ｑ２　ワンダースクエアの吹抜けは、複合施設の融合する空間としてどのように考えているか。

Ａ２　オープンの場として、アクティビティが見える空間とし、動線や視認を共有する空間を考えている。

Ｑ３　市民活動、ワークショップのイメージはどのように考えているか。

Ａ３　早い段階から各テーマを決めて関係部署と要望を洗い出していく。市とニーズを共に作っていき、関係部署と最適化する。

Ｑ４　ワンダースクエアは、４層吹抜け、１階柱頭免震、エスカレーターがあり、技術的な面が不明に感じるので説明してほしい。

Ａ４　エスカレーターは１階に固定し、２階をフリーにすることを考えている。事例もある。浸水対策を考慮し、外部広場に免震エキスパンションジョイントを取りたくないため、１階柱頭免震とした。

Ｑ５　均一な空間に、家具のみを置いたように見える。ＡＢＷ（アクティブ・

ベースド・ワーキング）について、どのようなアイデアを想定しているか。
Ａ５　外周部を使って、部署を超えた打合せを行う。自社でウェル認証を取得している。設計の段階で、庁内のデジタル担当部署と将来のビジョンを共有していきたい。
Ｑ６　「あつぎみんなの丘」について、その役割は。
Ａ６　バスターミナルがありウォーカブルな街なみにおいて、ランドマークとして認識できる拠点の一つとなり、都市の起爆剤になる。
Ｑ７　脱炭素の取組として、バイオマスボイラー／コジェネの提案がある。防災拠点としてのＢＣＰ対策は問題ないか。
Ａ７　ＢＣＰのバックアップとして中圧ガスを利用することを考えている。
Ｑ８　テラスの緑化の維持管理に課題はないか。
Ａ８　メンテナンスに配慮していきたい。フェイクとすることも一つの考えだろう。

ウ　提案者Ｃ

Ｑ１　外と内の２択になっている。外界との距離をどのように選択しているのか。
Ａ１　コロナ禍、大きな気積は有効である。１階外周部を広場とし、内外一体としている。屋上も広場としている。
Ｑ２　チームリーダーが多い。チームマネジメントをどのように考えているのか。
Ａ２　チーム体制は、シームレスにみんなで対応し、最終的には管理技術者が責任を持つ。過ごすラボは、運営面をまとめていく。複合的なプログラムを市と一緒に、与条件整理から運営面まで対応する。与条件を整理し、設計に引き渡す。
Ｑ３　メディアテクノロジー、電子書籍、モビリティーも変化している。広場的役割について、働き方も含めて建築的な回答がほしい。
Ａ３　大きな空間にフォリーを設置している。変化を受け入れて包み込む大きな空間にしている。メディア、情報、信頼感も集まる場所。顔の見える情報を吸収できる場所と考える。
Ｑ４　広場棟は、チューブ状の外周の柱が密になっているため屋内的に感じる。何をもって屋外的としているのか。
Ａ４　広場棟の柱、３層で密度を変えている。巨大なアトリウム空間で、柱が無いので、屋外的で象徴的な空間となっている。
Ｑ５　環境制御について、パッシブな印象を受けるがどのように考えているか。
Ａ５　外壁の内側にカーテンを配したダブルスキンとしている。外壁とカーテンの間に空気を通している。日射もコントロールできる。
Ｑ６　構造及び外壁にかかるコスト、維持管理費に懸念がある。どのように考えているか。
Ａ６　構造体が日射制御の役割も担っている。中間期は、自然通風が可能となる。

Ｑ７　過ごすラボが庁舎棟に対してどのような役割を果たすのか。
Ａ７　庁舎部分のクリエイティブな役割を担いたい。庁舎棟と広場棟の運営計画を水平に連携している。庁舎棟から市民活動を間近に見えることで、課題を市民と連携して検討できる。
Ｑ８　災害対応として、広場棟の書架、家具の転倒防止や免震層の浸水防止はどのように考えているか。
Ａ８　広場棟は、重要度係数を 1.25 に設定している。家具は床に固定し、転倒が無いようにする。天井仕上げがなく、天井を吊らないため、落下がない。免震ゴムは浸水しても問題はない。免震ピットは排水ポンプで排水する。

エ　提案者Ｄ

Ｑ１　段々広場はバスセンター上部広場の計画が無くなった場合、どうなるのか。
Ａ１　駅からの動線にバス出入口道路があり分断されるためオーバーブリッジは必要と考える。また、バスセンターに面した部分に、１階と２階をつなぐ階段を計画していく。
Ｑ２　低層部の吹抜けの階段の竪穴区画はどのように対応するのか。
Ａ２　吹抜けについて、シャッターで区画できる部分は区画し、避難安全検証法等で、柔軟に検討する。先に高層棟、北側の駐車場を建設することで、半年工期が短縮できる。その分、議論に時間をかけることも可能となる。
Ｑ３　図書館や事務所は、メディアテクノロジーの変化の影響を大きく受ける施設になる。これによるワークスタイルの変化を建築としてどのように解決するのか。
Ａ３　固定された空間と緩やかに街に開いた空間とを分けて計画している。街の道はロビー。本の道は図書館とは別にしている。街に開いた部分を本の道とし、それぞれの道を変化させ育てていく。図書館をカジュアルにデジタルでもアクセスできることを期待している。
Ｑ４　本の存在感、価値が下がってきた時、どのように対応するのか。
Ａ４　パブリックの場を広げて、図書館部分が溶け出すようにするなどフレキシブルに対応する。
Ｑ５　庁舎の執務空間は多様化している。これからの目指すもの、未来の設計条件について、どのように考えているか。
Ａ５　１ルームで何にでも対応できるフレキシブルが基本と考える。市の職員と一緒に考えていきたい。２・３階の図書館の一部を、ワークショップで使うことができる。庁舎のサテライトエリアに利用することなどを検討していきたい。
Ｑ６　図書館の浸水対策はどのように考えているか。
Ａ６　１階は移動図書対応とし、書庫は４階に計画している。移動図書の書庫は４階に計画することもできる。１階は市民を迎え入れるナビゲーション機能とし、柔軟に計画したい。配架については、一緒に議論していきたい。
Ｑ７　市庁舎の役割はどのように考えているのか。

Ａ７　人の流れの中心となる。市民活動の中心となって、ここから活動が外に広がっていく。

オ　提案者Ｅ

Ｑ１　市民活動スペース、あつぎ未来フォーラムに類する実績を示してほしい。

Ａ１　複合施設の実績がある。専門コンサルとＪＶを超えた共創・フラットな体制としている。あつぎ未来フォーラムは、要望を聞き入れるプラットフォーム、受皿としている。対話型の実績は、被災地でも実施している。

Ｑ２　市庁舎機能を立体的な配置としていることについて、明瞭さが欠けている。建築の工夫で解決できるのか。

Ａ２　市役所の窓口を２・３階に分けているが、２階は市民のライフイベントに関する窓口、３階は子ども、高齢者、福祉の相談の窓口としている。必ずしも同一階にある必要はないと考える。バック動線はつながっている。ソトニワ、ウチニワ、トオリニワで骨格を作り、空間を明瞭につないでいく。

Ｑ３　メディアテクノロジーのイノベーションや開架書架の後退の変化に建築的にどう対応していくのか。

Ａ３　今の複合施設を成立させることで、変化に対応する。本を介した居場所の空間とすることで、メディアの将来性に対応する。本と出会えるドラマを生み出すような空間を生み出したい。

Ｑ４　中層に抑え込んでおり、外観はスラブの積層に見える。外観のキャラクターが見えにくい。市の象徴性、市のこれからをどのように主張しているのか。

Ａ４　市民の居場所を検討した結果の形である。内部空間の活動が外にあふれ出る外観としている。

Ｑ５　ループ状の構成が見えにくい。ループ状にしたことによる機能連鎖は効果的か。

Ａ５　ループ状のロの字プランで、反対側を見てつながりを感じていくなど、交互に関係性が連鎖し合うことを想定している。バックヤードもループ状につながる。

Ｑ６　市庁舎の働き方のバージョンアップについて、どう対応していくのか。

Ａ６　コロナ禍のテレワーク等により、変わっていくことを期待している。ＩＣＴにより、窓口以外のつながりが主流になる。市に合った行き先を市と考えていきたい。

Ｑ７　事務室プランは、二つが雁行している。コアを北東に集約した理由は。

Ａ７　１か所で対応できる計画とした。

Ｑ８　ネスト制震は特許工法か。施工に支障はあるか。

Ａ８　鋼板と粘性体の制震装置は、一般的なもの。特許工法ではなく、構造の大臣認定を取得することで特段の問題はないと考える。

(4) 閉会（霜島副委員長 宣言）

３　第二次審査協議

(1) 意見交換

ア　Ａ者

・ 複雑なプログラムの実現と市民や職員との対話に取り組むための、役割分担を明確にした設計体制は、評価できる。
・ 事務所階の構成は、現代的な要求に応えうる空間構成として評価できる。
・ 基壇部の構成は、空間的魅力がある。
・ １階の「私たちの舞台」の環境やイベントのない時の雰囲気に懸念がある。
・ 基本的な設計コンセプトの一つである「厚木トレイル」に建築的実体がない。誰のための道筋なのかが不明である。

イ　Ｂ者

・ 全体において危なげなく堅実にまとまり安心感を与える。
・一般的な建物構成であり、特徴に乏しい。
・ 基壇を垂直に貫通する「ワンダースクエア」の吹き抜けなどが型通りに感じる。
・ 「ワンダースクエア」は、今後の大きな変化に対応できるのか、長い期間にわたり魅力を感じさせることができるのか、危惧される。

ウ　Ｃ者

・ 複合施設を２棟に分けることにより、それぞれの施設の独立性を高く保ちながら、庁舎機能と文化情報機能を地続きでの連携を可能させることは評価できる。
・ 多様な要求を組み上げ、複雑で困難な問題に対応するべく様々な専門家を組織した設計体制にも特徴がある。
・ 複合することで必要な情報を幅広く集めることを可能とし、時代に即した姿勢を実現すること建物構成が強く意識されている。
・ 広場棟を耐震構造としているが、公共施設としての安全性の検討が必要である。
・ 特徴的な空間構成は、建設コストや維持管理費の増大など、設計段階での検討が必要である。

エ　Ｄ者

・ 利用者の動線や風などを「流れ」と捉え、それを建築形態に写し、「本の道」と「街の道」と名付けられた通路や階段などが空中を飛び交うダイナミックな構成となっていて評価できる。
・ 外観では低層部は「丘」と名付けられ、隣接するバスセンターにまで及んでいる点は評価できる。
・ 建物内部の複数階を結ぶために斜路や階段が多数設けられているが、たとえエレベーターを増やしても、また、斜行エレベーターを設置しても、ベビーカーや車いすの市民が本案最大の魅力的な場所を迂回せざるを得ないところは、公共施設の構成として疑問がある。
・ バスセンターの上部に人工地盤を伸ばすことの難しさ（都市計画決定のやり直し等）がある。

・ バスセンターを含めないと丘に見えなくなってしまうのではないか。

オ　Ｅ者

・ 全体的に丁寧に組み立てられた提案であり、部分にもきめ細かな配慮が認められ、市民に親しまれる施設になることが期待される。
・ ＮＥＳＴ制震構造は、この空間の特質を強化し、意匠と構造が融合した優れた提案として評価できる。
・ 細かく分節された外観によって施設全体の主張が曖昧に感じられる。
・ 建物内部でも迷路感が否めない。

(2) 採点

各評価基準に基づく評価の結果、次のとおり、評価点数の合計得点をもって受注候補者及び次点候補者を特定しました。

評価項目	配点	Ａ者	Ｂ者	Ｃ者	Ｄ者	Ｅ者
業務実施方針書、技術提案書	96.0	64.0	49.3	85.1	53.6	72.7
提案価格書	4.0	2.6	4.0	2.5	2.5	2.5
評価点	100.0	66.6	53.3	87.6	56.1	75.2

※　業務実施方針書、技術提案書の評価点については、各委員採点を平均したものです。

(3) 受注候補者及び次点候補者の特定

ア　受注候補者

石本建築事務所・石上純也建築設計事務所設計共同企業体

イ　次点候補者

非公開（受注候補者に事故等があり、契約が不能となった場合に公表します。）

以 上